

稲・大豆作情報（NO. 7）

1. 水稻作況情報田の生育概況（8月12日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	葉 色 SPAD	
夢しずく 上峰町	6/7 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	出穂期 8月9日 8月11日 -2日				移植後、高温多照が続いていたが、8月2～3半旬にかけては曇天が続き、降水量は平年を大幅に上回った。（8/7日から5日間の積算降水量：218mm） ○出穂期は「夢しずく」で平年より2日早い。 ○草丈は「ヒヨクモチ」で平年よりやや低い。 ○茎数は「ヒヨクモチ」で平年よりやや少ない。 ○葉齢から見た生育の早遅は「ヒヨクモチ」で平年並み。
ヒヨクモチ 千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	71.8 75.0 (96)	646 661 (98)	13.6 13.8 (-0.2)	39.3 37.6 (+1.7)	
ひなたまる 千代田町	6/20 17.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	79.1 - -	365 - -	13.3 - -	39.8	

注1）各品種 前作：麦

注2）施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3）平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値

注4）「さがびより」は本年は情報田を設置しておらず、以下の農業試験研究センター米づくり情報を参考としてください。

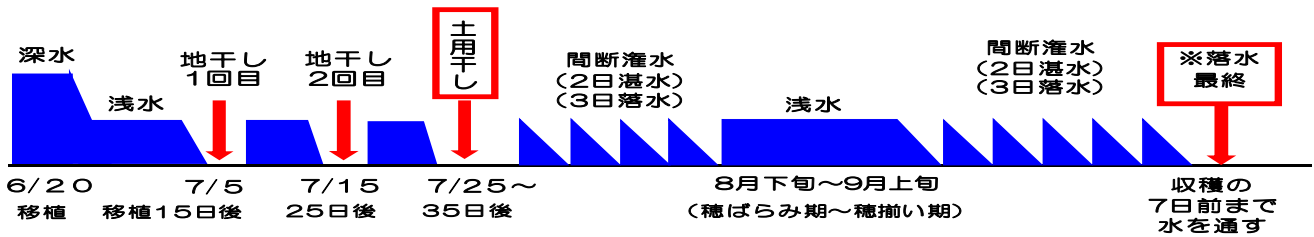
注5）ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。

◆農業試験研究センター米づくり情報7号 8月13日（抜粋）

移植日	項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	葉 齢 L	葉 色 SPAD	概 況 (平年または前年との比較)
6月18日	夢しずく	本 年 平 年 平年比(差)	96.3 85.5 113	362 393 92	13.2 13.3 (-0.1)	39.3 37.0 (+2.3)	【気象】 8月6日～8月12日まで ◆平均気温…0.4℃低い ◆日照時間…短い(平年比 33%) ◆降水量…多い(平年比 461%) 【生育】 ◆草丈 「夢しずく」は高い、「ヒノヒカリ」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」はやや高い、「ひなたまる」は低い。 ◆茎数 「夢しずく」は少ない、「ヒノヒカリ」はやや少ない、「さがびより」はやや多い、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「ヒノヒカリ」はやや進んでいる、その他の品種は平年並み。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」は濃い、「ヒノヒカリ」、「さがびより」はやや濃い、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ひなたまる」は淡い。
	ヒノヒカリ	本 年 平 年 平年比(差)	84.7 82.4 103	459 483 95	13.8 13.4 (+0.4)	38.8 37.1 (+1.7)	
	ひなたまる	本 年 前 年 前年比(差)	79.3 88.0 90	415 379 109	14.2 14.1 (+0.1)	37.2 43.9 (-6.7)	
6月20日	さがびより	本 年 平 年 平年比(差)	80.3 78.2 103	502 479 105	13.8 13.6 (+0.2)	37.0 35.7 (+1.3)	
	ヒヨクモチ	本 年 平 年 平年比(差)	75.0 71.8 104	769 624 123	13.9 13.8 (+0.1)	35.8 35.9 (-0.1)	

2. 水稻における今後の管理

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～



「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、間もなく穂揃い期、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、8月15日頃に出穂期を迎える。出穂期以降は出穂後5日まで湛水管理とし、その後、根の活力維持及び地固めを行うため、間断灌水に移行する。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は、間もなく止葉が抽出し穂ばらみ期を迎える見込みで、「さがびより」は幼穂形成期を迎えている。「ヒヨクモチ」は、間もなく幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

○大雨による浸灌水後の管理について(全品種共通)

- ・8月10日からの断続的な豪雨により、浸冠水の被害を受けた圃場は、根の活力維持を図るために、一旦排水して新しい水と交換し、その後は、間断灌水へ移行する。
- ・今後も高温が続くと予想される。特に夜間の高温は、穂への養分転流が阻害され、登熟歩合の低下や白未熟粒発生による品質低下が懸念される。そこで、湛水管理を行う際に夕方以降の入水が可能であれば・・・
⇒ 昼間の浅水 → 夜間の湛水管理を行い、なるべく地温を下げるよう努め、収量・品質の向上を図る。

○施肥管理

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」

- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は、8月9～10日頃が穂肥の施用であったと考えられる。
- ・豪雨の影響で穂肥の施用が出来なかった圃場では、穂肥診断基準(稲・大豆作情報6号参照)に基づき早急に穂肥を施用する。

「さがびより」

- ・「さがびより」は、6月24日頃に移植された圃場で、幼穂が5mm(8月13日現在)となっており、穂肥の施用時期となっている。
- ・穂肥の施用時期は、幼穂長5～10mmが基準。5mmに達したのを確認し施用する。
- ・6月20日頃に移植された圃場では、既に穂肥の施用時期を迎えていると考えられるため、10日からの豪雨で穂肥の施用が遅れた圃場では、穂肥診断基準に基づき速やかに穂肥を施用する。
- ・本年は、平年に比べ草丈が低く、葉色も淡い圃場が多いため「さがびより」の穂肥診断基準は、下記のとおり県基準に準じた基準での診断とする。(平坦～山麓まで共通)

★「さがびより」の穂肥施用のポイント

- ①早くても幼穂5mmを確認してから施用する。
- ②出穂前18日(幼穂の長さ10mm)に施用。
- ②草丈が75cm以上で葉色が濃い(SPAD値37以上)場合は施用しない。
- ③草丈が75cm以下で、葉色が淡い(SPAD値33以下)場合は、2日程度早める。(出穂前22～20日に施用)

表1.「さがびより」穂肥診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2. 5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2. 0	12.5
	3.5	37～38	16日	15mm	1. 0	6.0
	3.8以上	39以上	施 用 し な い			
75～80cm	3.0以下	36以下	18～20日	10～15mm	1. 5	9.4
	3.0以上	37以上	施 用 し な い			
80cm以上	施 用 し な い					

※葉色が濃い圃場や幼穂長が15mm以上になっている圃場は、穂肥は施用しない。

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、間もなく幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・施用時期が遅れないように表3の施肥基準を参考に穂肥を施用する。

表2. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

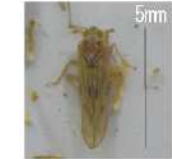
※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計(SPAD)で40を切る場合、窒素成分で2kg/10a程度(BB602 15kg/10a)施用する。大豆跡では、上記の5割未満に減肥して施用する。

○病害虫情報(発生および防除)

I. 予報の概要および各作物の特記事項

佐賀県農業技術防除センター

病害虫発生予察情報予報第4号より一部抜粋

作物名	病害虫名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稻 (早期)	紋枯病	並	 斑点米カメムシ類
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稻 (山間早植え)	穂いもち	並	
	紋枯病	やや多	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	 トビイロウンカ  コブノメイガ
水稻 (普通期)	穂いもち	並	
	紋枯病	やや多	
	白葉枯病	並	
	もみ枯細菌病	並	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	フタオビコヤガ	並	
	斑点米カメムシ類	やや多	

【ウンカ類・コブノメイガ】最新情報は農業技術防除センターのHPで確認してください。

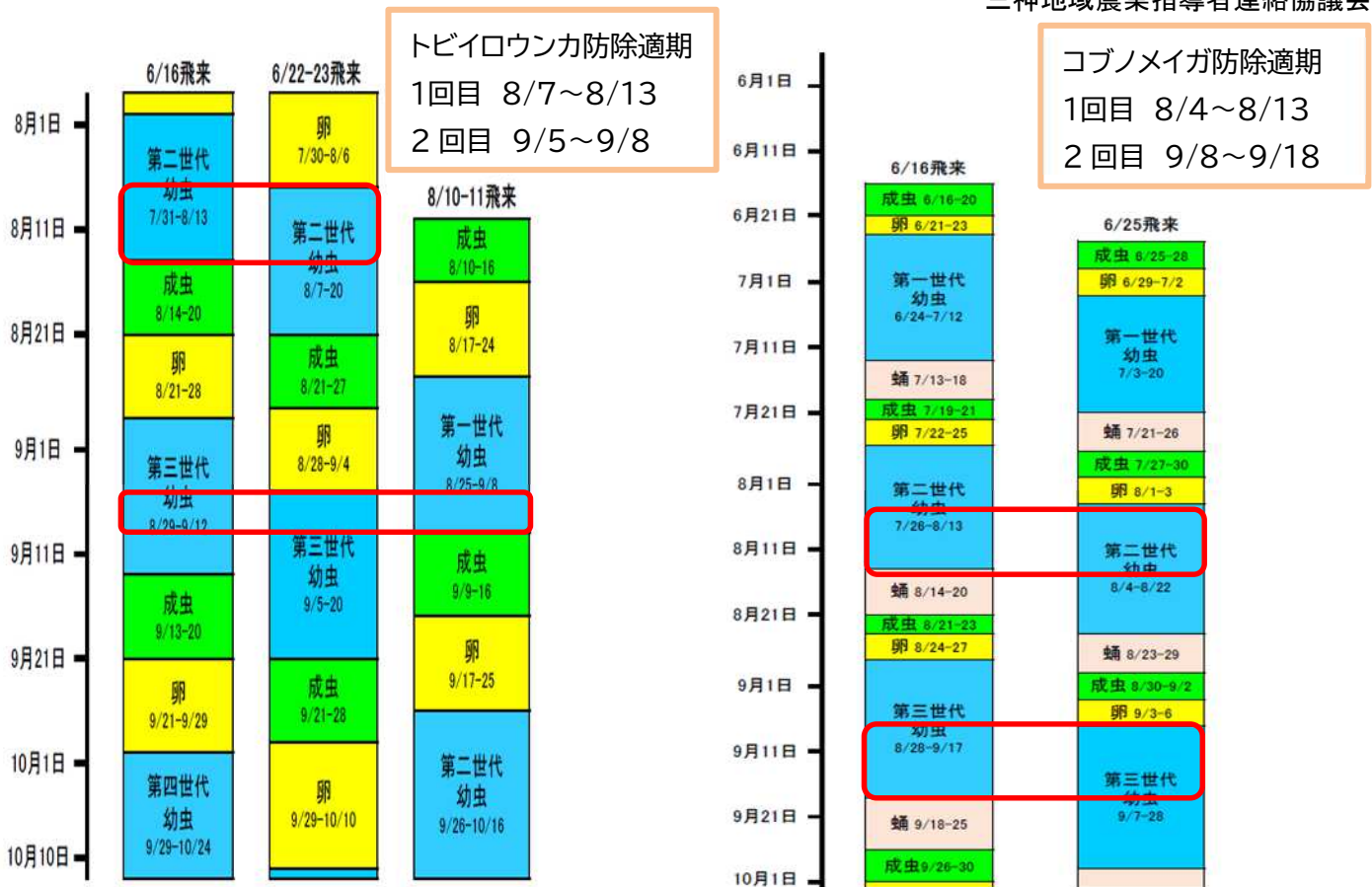


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第3版、2025年8月14日作成）

図 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

【斑点米カメムシ類】

- ・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。
- ※8月6日に農業技術防除センターより注意報が出されています。詳細は別途資料をご覧ください。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、**出穂 10 日前までに畦畔除草**を行う。
- ・山麓部や河川敷付近など、例年発生の多い圃場では田廻りを励行し、**乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心 に薬剤防除を徹底**する。 防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表 3. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂 10 日前
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17 頃まで
さがびより	8/30	～8/20 頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31 頃まで

※出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

【イネカメムシ】

- ・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種です。昨年、本県において広く分布していることが確認されています。本種は、水稻の出穂始めに糞を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせます。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となります。



イネカメムシの成虫（左）及び幼虫（右）

（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。

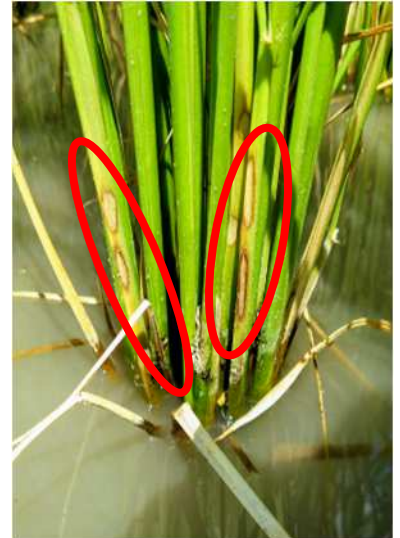
【いもち病】

- ・ 8月上旬は例年に比べ曇雨が多く、いもち病の発生好適条件であったため、本田で病斑の発生が認められたら臨機防除を検討し、特に上位葉に病斑が見られた時は速やかに防除を実施する。

【紋枯病】

- ・ 紋枯れ病が一部で確認され始めている。予察では、今後も気温が高く、多発生条件となっている。
- ・ 近年、多発傾向にあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。
（液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする）病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

※今年度から作付けを開始している「ひなたまる」は紋枯病に弱く、過去には紋枯病多発で倒伏した事例もあるため、基幹防除を徹底する。



ひなたまる (R6年 8月)

4.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・ 7月3～4日播種の圃場で9～10葉期、7/12～13播種の圃場では7～8葉期となっている。
- ・ 7月20～22日に播種した圃場では、4葉～5葉展開期となっている。

2 今後の管理

- ・ 豪雨による浸灌水を受けた圃場の一部では、株が弱り下位葉の黄化が確認されている。
- ・ 畝間に滞水が見られる圃場では、泥水や雨水が早く退水するように排水路の整備を行う。
- ・ 排水対策後、葉色が健全～やや黄化している場合など回復が期待できる圃場では、土壌が乾燥したのを確認次第、速やかに中耕培土を行うことで新根の発生を促し、生育の回復に努める。

なお、その際、速効性肥料を窒素成分で2～3 kg/10a施用すると、生育回復に効果的である。

3 干ばつ対策について

- ・ 現在のところ、8/4以降に降雨により、圃場の土壌は湿潤状態となっているため、当面の間、干ばつの影響はないと考えられるが、今後、高温・乾燥が続く対策が必要となった場合は、稲・大豆作情報5号を参照し対応する。



4 中耕・培土の実施

- ・ 7月下旬播種の大豆も中耕・培土の時期を迎えている。8/4以降の降雨により、土壌はやや湿潤となっているため、時期を迎え次第適宜中耕・培土を実施する。

中耕・培土は、1回目を3葉期頃、
2回目を5葉期頃に実施する。
2回目は、株元（子葉の下）まで土
がしっかりかかるように実施する。



5 雑草防除

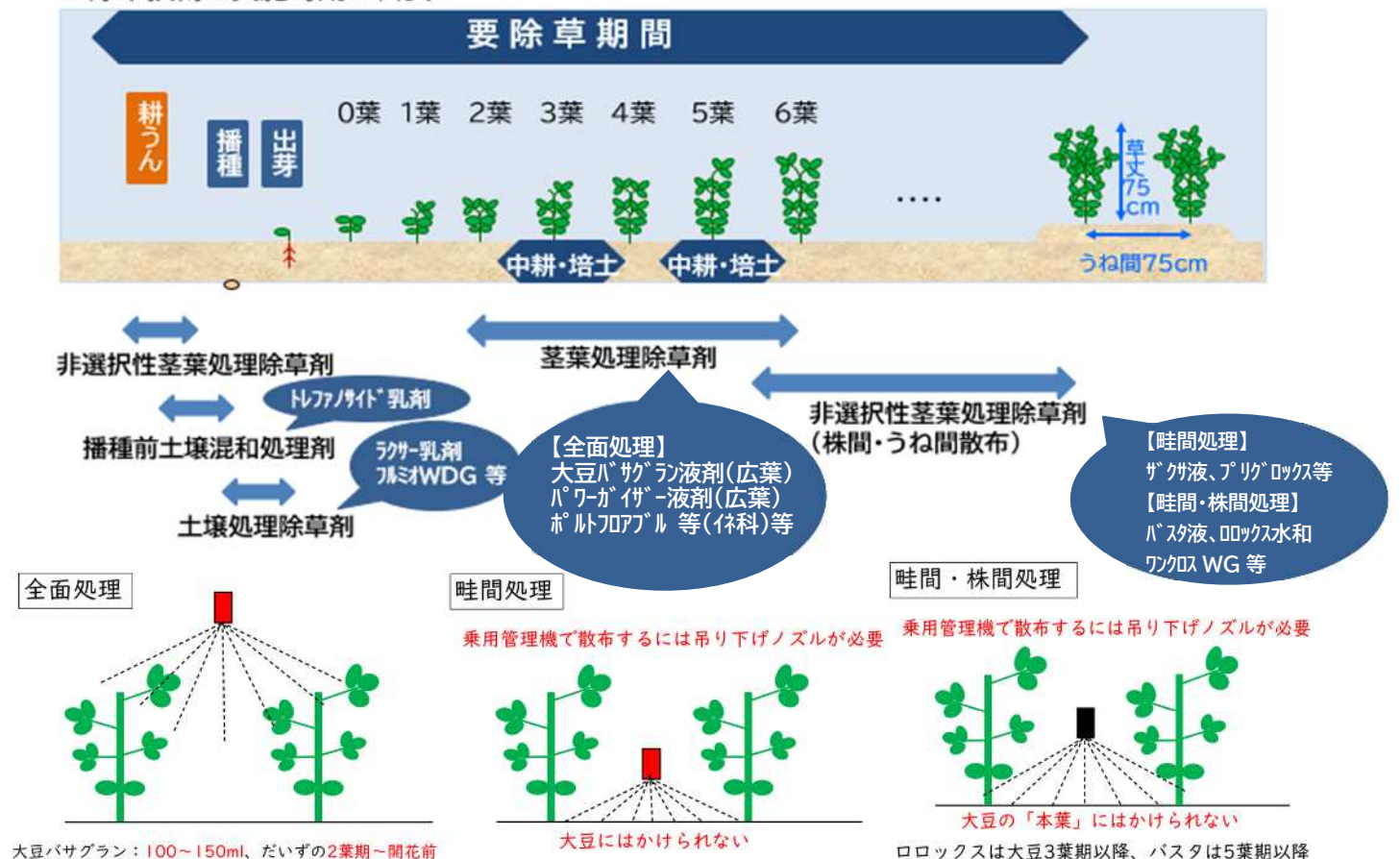
○難防除雑草への対応

- ・アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。
 - ・ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。
 - ・大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土で防除が可能である。
- ※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

播種前	播種直後	2葉期～開花期	生育期
基本体系	ラクサー 等		
播種前に雑草が多い場合	ラウンドアップ マックスロード、 プリグロックスL 等		
ホオズキ類 多発圃場	※ ※	ラクサー、 フルミオWDG	ラウンドアップマックスロード、バスタ、 プリグロックスL （うね間処理、バスタは株間処理も登録）
アサガオ類 多発圃場	蔓延圃場では、 耕起・播種直前の トレファノサイド 乳剤土壌混和处理	フルミオWDG +ラクサー	大豆バサグラン
ツユクサ類 多発圃場	プリグロックスL 等	（慣行剤）	プリグロックスL （うね間処理）

※ 必要に応じて散布

■除草技術と実施時期の目安



6 病虫害対策（発生及び防除）

【ハスモンヨトウ】→ 白変葉が発生

- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下するため、圃場をよく観察し適期防除を実施する。
- ・播種期が早い管内の一部圃場では白変葉が散見され、ハスモンヨトウの幼虫も確認されている。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。

【オオタバコガ・シロイチモジヨトウ】→ 葉っぱに穴が開く

- ・高温少雨が続いたためハスモンヨトウと同様に多発条件となっている。
- ・オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は7月6半旬に増加し、平年より多い（図1）。
- ・シロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数は、平年より多い（図2）。

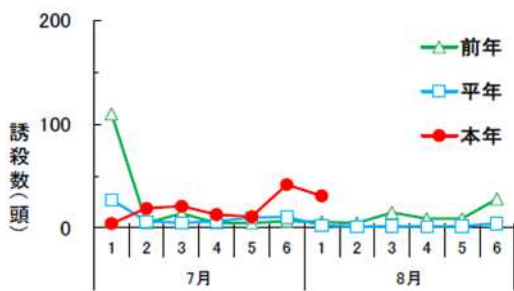


図1 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(佐賀市川副町・農業試験研究センター調査)

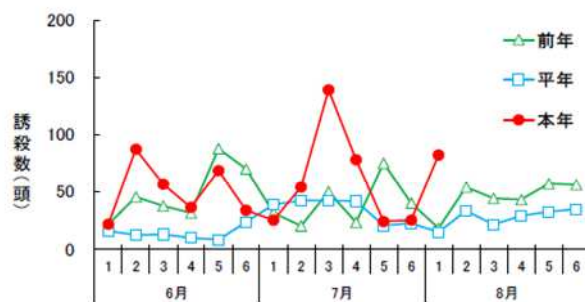


図2 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半旬別誘殺数
(佐賀市川副町・農業試験研究センター調査)

- ・管内でもオオタバコガによる食害が確認されており、管外では多発圃場も確認されている。臨機防除を実施された圃場では被害が抑えられているものの、防除をしていない圃場では食害の被害が大きくなっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合、オオタバコガによる食害の可能性が高く、ウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。



R7.8【佐城地区】オオタバコガによる食害程度が大きい圃場（R7.8）

表4. 防除薬剤（効果が高い薬剤）

	ハスモンヨトウ	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ
薬剤名	プロフレア, グレーシア, プレオ, ディアナ等	プロフレア, グレーシア, プレオ, 等

※ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており使用を避ける。

※オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボンは感受性が低下しており使用を避ける



食害による白変葉



食害で穴が空いた葉



ハスモンヨトウ



オオタバコガ



シロイチモジヨトウ

令和7年産 水稻生育期間気象グラフ

(アメダス観測地点：佐賀, データ更新日：8月14日)

三神農業振興センター

